

特集：日墨修交 400 年

ユカタン半島のカスタ戦争

山崎 眞次

初めに

エルナン・コルテスが 1521 年にアステカ帝国を征服してから、メキシコの植民地時代が始まり、1821 年にスペインから独立を達成するまで 300 年間続く。その間征服された先住民インディオが植民地各地で武装蜂起したことはよく知られている。また、独立後のメキシコにおいても先住民や農民の反乱が全国で頻発した。しかし、反乱の規模と持続した年数から考えると、1847 年にユカタン半島で勃発し、20 世紀初頭まで続いた「カスタ戦争」に比肩できるものはない。フスト・シエラ・オレイリーはこの戦争を「野蛮と文明の対立」という単純な二項対立的手法で分析しているが、そのような短絡的な分析では到底、カスタ戦争の真相に迫れるものではない。¹「カスタ戦争」という呼称を用いたのはラディーノ²である。「カスタ」とは血統とか階層という意味だが、白人支配階級は「文明化された白人と野蛮なマヤ先住民族」という対立の構図を作り上げ、人種間戦争に特化するために用いた。「カスタ」を前面に押し出すことで、反乱したインディオたちの後進性、野蛮性、残虐性を強弁し、戦争の原因を先住民側に一方的に押し付ける意図があったと考えるべきであろう。カスタ戦争は、白人特権階級（ラディーノ）対インディオ農民下層階級という社会階層と人種が複合した形で激しい闘争が展開され、貧富の差や搾取を糾

弾する社会的宗教的運動であったために、階級的、人種的、社会的、宗教的 4 つの様相を帯びているのである。

そのような民族的社会的特殊性に加え、ユカタン半島は中央政府があるメキシコ中央高原からは地理的に遠隔地であることも戦争の長期化の原因となった。半島は水運に恵まれ、海を利用してアメリカ合衆国、イギリス、スペイン、キューバとの関係を深め、その分、中央政府への依存度は低かった。また、ユカタン地域はスペインからの独立戦争には参加せず、宗主国に忠実であった。独立戦争への不参加は、スペイン王室がユカタン地域に特別関税を認めていたことが一因である。独立以降、中央政府が中央集権主義と連邦主義に分裂して、内乱状態だったために、中央政府からの援助、影響はほとんどなかった。白人とメスティーゾは独立後も中央政府の影響や関与を受けることなく、植民地時代のスペイン的搾取構造を維持した。ユカタン半島では、インディオにとって白人は独立国となってからも植民地時代と変わらぬ荘園の過酷な主であった。

そして、水運に恵まれていることは半島の特徴であったが、そのことが半島全体の対外関係の統一性を促すことにはならなかった。カンペチェ市とメリダ市の通商対象地域は異なっていた。メキシコ湾が主な活動拠点であったカンペチェ人たちはメキシコとの通商

を重視したが、半島の突端部に位置したメリダ市地域の住民たちは、カリブ海を見据え、海外との交易に活路を見出していた。その結果、カンペチェ人はメキシコ中央政府との関係を強め、一方、メリダ人は中央政府よりも諸外国との関係構築に努めた。地方のエリート間に生じた外交方針と交易政策をめぐる内紛も戦争の長期化の一因となったのである。

本稿では、1847 年 7 月の反乱勃発から州政府軍が勝利を収める 1850 年までの第 1 幕を主として扱い、それ以降、1901 年の聖地サン・チャンタ・クルスの陥落までのおおよそ 50 年間の膠着状態については、別の機会に論じる。

1. カンペチェとメリダの対立

スペイン継承戦争の結果、スペイン帝国の主となったブルボン家系の国王たちは、17 世紀以降長期低落傾向にあった帝国の建て直しに着手し、ハプスブルグ王朝時代の旧弊な制度の改革を行った。なかでもフランスの中央集権的制度に倣ったインテンデンシア（監察官領）制の導入は、政治面のみならず、税の増収を目的とする財政面、さらに植民地に侵入する英仏を阻止する防衛の見地からなされた改革であった。植民地へのインテンデンシア導入に伴い、従来のコレヒミエント（代官領）とアルカルデ・マヨール（郡）は廃止された。これらの役職にはクリオージョが多かったために、職を奪われたクリオージョの間に不満が燦った。経済面では従来のキント（5 分の 1 税）に加え、アルカバラ（売り上げ税）やタバコの専売制を導入し、王室は植民地から容赦なく税を取り立て、さらに臨時の特別税を裕福なクリオージョ階級に課した。このような本国への送金を最優先に考える非情な政策は「第 2 の征服」と呼ばれ、新大陸の植民地が独立する引き金になった。³

スペイン王室は、新大陸の植民地統治に関して王室と植民地のクリオージョのエリート間のきわめて緊密な協力関係に長期にわたり基礎を置いていた。しかし、ブルボン王家による改革によって、本国政府と植民地の間に亀裂が生じた。それだけではなく地域集団間の独立性も高まった。クリオージョのエリートによる統合は四分五裂し、そのような紛争は、独立への道を辿る時代において、政治的安定性を弱める大きな要因となった。中央と地方のクリオージョ・エリートたちは、紛争過程において大きく中央集権主義者と連邦主義者に分裂していった。

地方のエリート間対立の好例としてユカタン半島のカンペチェとメリダの主導権争いをあげることができる。双方の半島支配をめぐる競合関係はるか昔にさかのぼるが、ブルボン改革の進行に伴い、悪化していった。1770 年、王室はスペイン及びヌエバ・エスパニーニャの港における自由貿易権をカンペチェに付与した。この決定以前には、カンペチェのメキシコ湾とカリブ海の港に対する交易はそれほど活発ではなかったが、自由貿易権を獲得以降、国内外との協定締結によって、交易は飛躍的に増大し、1802 年頃、カンペチェへ寄港した船舶の数は 960 に上った。⁴ インテンデンシアの長官には、管区内の行政、財政、司法、軍事に関する権限が付与されていたために、その導入はメリダに恩恵をもたらした。

同時代のメリダの経済は、キューバや他のカリブ地域と密接に結びつき、ヌエバ・エスパニーニャ政府との関係は疎遠であり、半島の孤立化は深まった。するとカンペチェのエリートたちは、スペイン王室にたいして距離を置くようになり、半島自治推進者たちの運動を支持したが、このことがメリダの利害と衝突した。これらの対立は独立以降、激しさ

を増し、特に 1823 年、憲法制定議会が、イトゥルビデ帝国崩壊後に採用されるべき政府のあり方について議論を開始したときに顕著になった。1823 年 6 月 7 日、ユカタン政府の委員会はユカタンの議員に対して、メキシコとの合併は連邦制の下で達成されるものであり、もしこの制度が承認されなければ、ユカタン人は自分たちの「祖国」に復帰すべきであると告げた。そして 1823 年 8 月 25 日、連邦制が宣言され、ユカタンの独立運動はメキシコ国の 1 州として編入という形で終息した。

しかし連邦制協定への合意は、ユカタン半島で醸成された対立を取り除くことができなかった。1824 年 9 月には、数名の議員たちがメリダとカンペチェの利害を考慮した上で、この地方を二つの州に分割することを提案した。この提案が直ちに議会で審議されることはなかったが、この対立関係が国家問題と結びついたときにはそうはいかなかった。1835 年、それまで連邦主義を標榜していたサンタアナは、中央集権主義者に豹変し、従来の州を県に降格させ、県知事制は選挙ではなく大統領が任命する制度へと変更した。サンタアナは気心の知れた特権階級の知人や友人を県知事に任命した。ユカタン州は関税特権を失い、カンペチェの貿易は崩壊し、砂糖産業は危機に瀕した。また、1836 年の対テキサス戦争と 1838 年の対フランス戦争は、売上税の引き上げを引き起こし、貿易、海運に大きな影響を与えたばかりか多くのユカタン人が兵隊として戦場に赴かざるを得なくなり、人々の生活に直接影響を及ぼした。

1838 年 5 月、ユカタン政府軍の司令官、サンティアゴ・イマンは、半島北東部のティスミンで中央集権主義に対して反旗を翻した。戦闘開始時には敗退したが、インディオたちを招集することで勝利をものにすること

ができた。勝利した暁には教会税を廃止するというイマンの提案に獵銃や山刀を手にした数千のインディオが参戦し、瞬く間にバヤドリドを陥落させた。⁵ その勢いは止まらず、1840 年 6 月には、カンペチェに立てこもっていたメキシコ軍を放逐した。ユカタンの自由主義者たちは、メキシコが連邦制に復帰しない限り、独立を維持すると宣言した。カンペチェのサンティアゴ・メンデスが知事に、ミゲル・バルバチャノが副知事に任命された。メンデスはカンペチェの商人であり、カンペチェの貿易が主にメキシコ湾での交易に依存していることから、メキシコへの編入を訴えた。一方、ミゲル・バルバチャノはメリダが主にハバナとカリブ海諸国、並びにニューヨークと交易していることから、メキシコへの編入には興味はなかった。しかし、州の危機に直面して両者は協力したのである。新政権の下、先住民を含めたすべてのユカタン人を市民と宣言した新憲法が公布された。新憲法には信仰の自由、教会特権の廃止、司法や行政の職権乱用に異議申し立てができる庇護権が盛り込まれた。⁶ 1843 年、サンタアナは「共和国組織基本法」を制定して、中央集権体制を強化した。だが、ユカタン共和国は、連邦主義を否定し中央集権主義を掲げるサンタアナを大統領として承認しなかった。そこでサンタアナはユカタン討伐をもくろみ、2500 の兵員でカンペチェのカルメン市に侵入した。この侵略に対して、ユカタン政府の頭領ミゲル・バルバチャノは、参戦者には 1 平方レグアの荒蕪地の付与やインディオには人頭税の廃止や土地の付与という好条件を提示し、愛国者を募った。その結果、先住民を主とする 6000 人の兵が集結した。インディオ兵はペドロ・レムスとロペス・デ・ジェルゴの指揮下、勇敢に戦い、武器弾薬が尽きた敵軍を打ち破り、1843 年 6 月、撤退

させた。ユカタン軍には、5 年後、カスタ戦争を引き起こすセシリオ・チとハシント・パットが参加していた。この中央政府軍との戦いでインディオ兵を主体とする軍隊はその組織力と動員力に裏打ちされた軍事力を遺憾なく発揮し、インディオは自分たちの兵としての実力に目覚めた。しかし、約束された報償が与えられるどころか、逆にインディオ一人当たりの人頭税が 1 レアル増額され、土地も付与されなかった。⁷

II. 予 兆

ユカタンは勝利したにもかかわらず、経済は持ち直さなかった。そこで中央政府との関係改善に動いた。州政府の統治権、州兵の外国への派兵の義務免除、生産物をすべてのメキシコの港で自由に貿易できる特権を保証させる代わりに中央集権主義を承認した。1843 年 12 月、サンタアナはユカタンの併合協定に署名したが、⁸ 2 カ月後の 1844 年 2 月 21 日、メキシコ側の港で自由に貿易できるユカタン側の輸出品を制限する大蔵省政令を公布した。一方、ユカタンではカンペチェ派のメンデスとメリダ派のバルバチャノ間の闘争が連邦議会に送る代表の選考をめぐり激化していた。1846 年 1 月 1 日、ユカタンは公式にメキシコ共和国から分離、独立した。バルバチャノ派とメンデス派はその後も激しく対立した。両派の溝は、1846 年に勃発した米墨戦争でさらに深まった。バルバチャノ派は共和国再生の頭領としてアメリカ合衆国と戦うサンタアナを承認した。この出来事は 1846 年 10 月 25 日、カンペチェ側のクーデターを誘発することになった。ユカタンがメキシコに再編入すれば、戦闘中のアメリカの最新式の強力な軍艦がカンペチョを砲撃する可能性があった。⁹ カンペチェはメキシコ再編入が時期尚早と判断し、メキシコに対して

反旗を翻した。ドミンゴ・バレットに率いられたカンペチェ軍はメリダ攻略に向かった。このクーデターはカンペチェ地区からの住民からは支持されたが、半島の東部や南部ではまったく支持されなかった。唯一の例外は東部のティホスコ村でパチェコがカンペチェの蜂起を支持した。サンタアナは 1844 年 2 月 21 日の政令の廃止をユカタンに伝え、ユカタンの再編入の条件を受け入れた。バルバチャノはこの提案を受け入れ、メキシコ共和国への再復帰を宣言したが、メンデスは反対し、1846 年 12 月 8 日、再編入の決定を延期した。両者の軍事的衝突が繰り返され、カンペチェ軍はメリダ南部まで進出し、テカシュ、ティクル、ペトを占領した。東部地域ではティオスコとヤシュカバがカンペチェ側についた。バヤドリードの住人であるアントニオ・トゥルヘケとフアン・バスケスはペト占領後、バヤドリード進軍を命じられた。1847 年 1 月 11 日、トゥルヘケとバスケス軍はバヤドリード南方に位置するティシユカカルクブルを占領した。トゥルヘケはバヤドリードに立て籠もるベネガス大佐に降服を呼びかけたが、拒否された。同月 13 日、トゥルヘケ軍がシサル地区に進駐すると、この地区の住民はすべてトゥルヘケ軍に合流した。300 名の籠城兵に対して、3000 人の包囲軍では勝負は目に見えていた。15 日、包囲軍は町の中央広場に立て籠もっていた兵たちや家族に襲いかかり、彼らを撃ち殺したり、山刀で切り殺すという虐殺を行った。略奪は 8 日間続き、酒に酔ったインディオたちは死体を引きずりまわしたり、焚き火で焼いたり、残虐の限りを尽くした。教会もこの災厄から逃れることはできず、そこに避難していた人々は引きずり出され、入り口付近で殺された。指揮官のひとり、ボニファシオ・ノベロは¹⁰ 捕虜にしたベネガス大佐を殺し、その

遺体を引き裂き、町中を引き回した。セラピオ・バケイロは、バヤドリッド虐殺の原因の一つとして、低所得者地域に住むインディオたちが、市の中心区域の居住者である白人富裕層に対して日ごろから抱いていた憎悪をあげている。¹¹カンペチェ側の勝利はインディオ兵の活躍によるところが大きかった。インディオの軍事力がラディーノたちの内紛の勝敗を左右するまでに成長したのである。ラディーノたちは敵陣営を打ち負かすために、インディオ兵たちに実現できそうにもない口約束をして、自陣に引きこもうとするようになった。

III. カスタ戦争の勃発

チチミラの首長、マヌエル・アントニオ・アイ、ティホスコの首長ハシント・パット、イチムルの住人、セシリオ・チ、バヤドリッド出身のメスティーソ、ボニファシオ・ノベロが反乱した先住民軍の指導者たちである。パットはラディーノ政府を変更すること、アイは白人をユカタンから追放すること、チはすべての白人の殲滅を望んだ。播種の後、インディオたちは蜂起する計画であった。クルンピッチで武器弾薬と食糧を集めているのを目撃したラディーノのひとりがバヤドリッドのエウヘニオ・ロサドに謀反を報告した。ロサドはペトの首長トゥルヘケにかつての部下であるチとパットの逮捕を命じた。トゥルヘケがクルンピッチのパットの農場に行ってみたが、反乱の兆候はなく、情報は偽りでバヤドリッドの殺戮に参加したインディオを罠にかけるとの陰謀であると言われた。しかし、アイはロサドのパトロール隊に捕縛され、反乱計画書が発見された。アイ、チ、パット、ノベロが人頭税の軽減を要求して反乱を企てたことが明らかにされた。1月の残虐行為の復讐に燃えた人々はバヤドリッドのサン

タアナ広場にアイを連行し、7月26日に銃殺した。それまでユカタンでは戦争捕虜は銃殺されることはなかった。捕虜となった白人が銃殺に処されることはなかったのである。インディオたちはここでも白人と同列に扱われない自分たちの境遇を思い知らされたのである。この処刑はチとパットに捕まれば、殺されることを意味した。彼らには生きるか死ぬかの戦いが始まったのである。1847年7月30日、チはデピチを急襲し、ラディーノの家族の老若男女を血祭りに挙げた。¹²その報復として州政府軍はデピチのマヤ先住民を皆殺しにした。こうして半島全体に反乱の火の手が上がった。リードは反乱に至る経過を詳細に語っているが、マヤのインディオたちが幾度弾圧されてもなぜ再び執拗に武器を手に取り立ち上がるのか、その歴史的背景に迫る必要がある。仮にチがラディーノたちの殲滅を望んでいたとしても、マヤ先住民族が過去300年以上にわたり土地を強奪され、ペオンとして酷使され、ときには肌の色が褐色という理由だけで殺されてきた苦難の歴史をわれわれは銘記すべきであろう。彼らが蜂起したのは、非先住民を排除するためではなく、自分たちの失われようとしている共同体社会を守るためである。

ハシント・パットとユカタン州知事のバルバチャノは和平協定をまとめようとした。パットはマヤ族の自治権の確立を要求するとともに、積年の負債による隷属状態を糾弾し、次の2つの提案を行った：①白人支配階級によって課された人頭税の免除。②教会の秘蹟（洗礼、堅信、聖餐、許しの秘蹟、病者の塗油、叙階、結婚）にかかる費用を軽減し、人種間の費用の平等性を確立すること。¹³パットが交渉相手としたバルバチャノはこのツカカブ協定に同意したように見せかけていたが、彼の真意は兵員数で勝り、勢いづいたインディ

オ軍の分断にあったのではなかろうか。ツカカブ協定の9条の概要は以下のとおりである。

1. 人頭税は白人、先住民を問わず、すべてのユカタン人から永遠に廃止する。
2. 洗礼謝礼金の3レアルと婚礼謝礼金の10レアルは一般住民、先住民を問わず、すべてのユカタン人に同等に課す。
3. 耕作地と農園は村の入会地、共有地、荒蕪地に小作料の支払いなしに設定可能で、今後、譲渡不可とする。
4. ハシント・パットの調停により、州政府によって押収された2500丁の銃はインディオに直ちに返還されるものとする。その数に達しない場合は不足分を購入しハシント・パットに搬送すること。現在、インディオが携行するすべての武器はそのまま彼らに帰属する。ハシント・パット軍が所有している家畜とその他の財は彼らの所有とする。
5. ミゲル・バルバチャノ知事がこれらの合意を実行することを保証する唯一の人物であるが故に、彼の地位は終身である。
6. ハシント・パット頭領はユカタンのインディオの全リーダーの知事となり、ミゲル・バルバチャノ知事とともに人々の協調推進のための体制をつくる。
7. 負債のあるすべての労働者は残債の支払いを免除される。
8. 焼酎税はユカタンのすべての民に対して廃止される。
9. ミゲル・バルバチャノ知事がこの協定を批准した場合は、秩序維持のための兵員を除いて、すべての戦闘員は帰還するものとする。¹⁴

協定内容を知ったセシリオ・チは、パット

を卑怯な裏切り者と罵った書簡を送り、自軍をツカカブに動員した。チの攻撃を知ったパットは、バルバチャノに銃の受け渡しを書簡で迫ったが、時すでに遅く、チ軍はマニを破壊し、200名以上の死者を出していた。ラディーノに何度も欺かれているチは、バルバチャノの休戦協定の提案をインディオ間の分裂を図ろうとする策略と見なしたのである。

一方、反乱に参加したマヤの指導者たちの考えに統一性はなく、出身地、社会的地位、個人的目的や野心、率いる軍の構成等によってまちまちであった。各村落間の連帯は希薄で、それぞれの首長の考え方に左右される傾向が強かった。共通認識といえば、彼らを長年搾取してきた白人への憎悪である。1847年の反乱の指導者、ハシント・パットとセシリオ・チの生い立ちと白人観は異なる。パットはバヤドリッド地域の富裕な農園経営者であり、教養もあったが、チはテピチの首長で貧しかった。チの目的はユカタンのすべての非先住民を皆殺しにすることであった。パットは、チに反乱してバルバチャノの政党を支持させようとしたが、逆にチに圧力をかけられ白人をメリダに排撃することに同意した。¹⁵

1848年5月には、反乱軍はカンペチェからほんの8キロ地点、メリダから24キロ地点まで迫り、両市の陥落は時間の問題であった。住民たちはパニック状態に陥り、荷物をまとめて乗船しハバナ、ベラクルス、カルメン市へ向かった。しかし不思議なことにマヤ族は一部の戦争継続派を除き、一斉に退却し始め、故郷の村に帰り始めたのである。武器弾薬が尽きた上に播種の時期である雨季が始まったからである。彼らにとっては、播種と儀式的のほうが、メリダの攻略や戦利品より重要であった。こうして両市の陥落は回避され、反乱の第1幕は閉じられた。ラディー

ノたちはこの経験を生かし、悲劇の原因を探り、内部や外部の対立要因の除去・軽減に努めた。インディオの憎悪に満ちた攻撃に驚愕したバルバチャノ派とメンデス派は和解した。権力を掌握していたメンデスはバルバチャノに呼びかけ和平を結び、知事職を辞任した。そして反乱軍と戦うために米国、スペイン、イギリスに帰属することを条件に彼らの援助を申し出たが、拒否されたので、次に 1848 年 8 月 17 日、メキシコへの再編入を申し出た。メキシコ議会は同年 5 月にはすでに反乱鎮圧用の現金と 2000 丁の銃をバルバチャノ知事に提供することに同意していた。¹⁶

IV. 反乱の収束

インディオ部隊の総引き上げの結果、1849 年初頭には州政府軍の勝利は決定的となり、東はバヤドリード、南はペト、ティホスコ周辺まで政府軍によって奪回された。チはヤシュカバとソトウタを包囲したが、州政府軍に奪回された。インディオ軍の占領区はわずかに南のバカルル地域のみとなり、白人の勢力が及ばない半島の東南部に広がる密林へ逃れた先住民も多かった。また、半島西側のインディオたちは政府軍に寝返り、反乱軍に敵対した。政府軍の半島制圧は近いと思われた。州政府軍の勝利の原因は、メキシコ連邦政府からの武器弾薬の供与、教会の経済的援助、政府軍の統率力と巧みな軍略が挙げられる。さらに捕虜にしたインディオをキューバに売買することによって得た代金で軍の食糧補給や給料を賄えたことも勝利に貢献した。また、その売買代金で、米墨戦争終結後、除隊したアメリカ兵を雇用し、彼らの軍事専門家としての知見を軍略に利用した。千名近い米兵は月額 8 ドルの給与と 130 ヘクタールの土地給付という条件に惹かれ、1848 年

夏、ユカタン半島に上陸した。ネルソン・リードは、米兵たちは奴隷制に基づく帝国の建設を米国に近いカリブ海の半島に夢見ていたと語っている。¹⁷

パットは密林の中にあるタビに、ノペロはマハスに、チはチャンチェンに退却した。だが、チは部下のメスティーソに裏切られ、ティホスコが陥落した翌日、暗殺された。裏切り者は即刻捕らえられ、ずたずたにされた。チの遺骸は故郷のテピチで丁寧に埋葬された。チの暗殺後、パットとチの部下であったフロレンティーノ・チャン、ベナンシオ・ペックの間に対立が生まれた。ペックはパットが戦利品を独り占めにし、武器弾薬の購買のために部下に税と強制労働を課していることを非難した。そして 1849 年 9 月、バカルルから約 80 キロ南のホルチェン泉でパットを急襲し、捕らえ、暗殺した。生き残りの達人ノペロはバヤドリード周辺を彷徨し、パットの部下、ホセ・マリア・バレラはカンポコルチェで引き続き軍を率いた。¹⁸

反乱軍側では、リーダーの二人が暗殺され、兵は烏合の衆となり、総退却が始まり、何千ものインディオが政府軍に寝返った。バルバチャノは反乱軍に参加したインディオばかりか、中立のインディオまで捕虜としキューバへ売り払った。1848 年 11 月 6 日、バルバチャノは武器を携帯した先住民捕虜をキューバへ奴隷として“輸出”する法令を公布した。さらに同知事はキューバ人との間で先住民捕虜を 10 年間、農園で強制労働に従事させる協定にも署名した。代金の一部は政府軍兵士に報償として付与されたために、褒賞金ほしさにインディオ狩りが始まった。サンタアナはキューバ人の奴隷主義者と結託し、この取引を奨励した。フスト・シエラ・オレイリーは、それらの措置を次のような理屈で正当化してみせた。

「われわれとしては、このやり方に賛成です。もっと早くからこうしておくべきでした。われわれの利益とインディオたちの利益を分離せねばならぬことが理解されはじめたことが、これで明確になりました。インディオたちには他の民族と融和する（このような比喻を使うことをお許しください）意志はなく、また、その能力もないのです。この民族は、厳しく管理されなければなりません。さらに、もしも可能ならば、この国から追放すべきです。彼らに対してこれ以上の寛容はありません。この苦境に明らかになった彼らの本性は、強い力で抑え込まねばなりません。人類が、文明が、これをわれわれに命じているのです」¹⁹

イギリスは州政府と反乱軍の調停を買って出て、ユカタンとベリーズ間の空間に独立した地域の設定を提案した。メキシコ政府はこの提案を承認しようとしたが、バルバチャノはイギリスの拡張主義を容認することになるとして中央政府に対して断固たる反対を表明した。その後もベリーズのイギリス人は相変わらず反乱軍インディオに武器弾薬を売り渡していた。州政府軍と半島東南部に拠点を構える反乱軍は断続的に小競り合いを繰り返し、1850 年は終わった。

現在のキンタナロ州東南部に立て籠もった反乱軍は、指導者を失い、食糧をもとめて密林をさ迷っていた。植民地時代の 300 年間、彼らの精神を導いてくれたカトリックの教義は失われ、彼らの面倒をみてくれた司祭たちも政府軍側についていた。そこで、パットの部下だったメスティーソのホセ・マリア・バレラは、意気消沈したマヤ族の精神的支柱となり彼らを鼓舞するような、伝統的教義に依拠した新しい信仰の創造を思いついた。バレラはチャン・サンタ・クルスでマホガニーの木片に長さ 10 センチ余りの十字架を彫り、

「話す」能力を与えた。インディオ兵の前に十字架をかざすと、この十字架は、神が彼らを加護するのでラディーノたちに抵抗し彼らに攻撃をしかけるべきであると話し始めたのである。十字架はさらにインディオ兵は敵の弾丸から守られていると告げた。この奇跡に奮い立ち、インディオ兵はお告げどおり、カンポコルチュ村を攻撃したが、政府軍によって撃退されてしまった。政府軍はチャン・サンタ・クルスを襲撃し、十字架を持ち去った。この襲撃の際にバレラに使えていた腹話術師のマヌエル・ナワは命を落とした。しかしバレラは意気阻喪することなく、彼の部下のフアン・クルスを十字架の仲介者に仕立て上げ、フアン・クルスを介して神のお告げを伝えた。この宗教的民族精神によってマヤ族は生氣を取り戻した。政府軍はたびたびチャン・サンタ・クルスを攻撃したが、そのつど敗走した。「語る十字架」の奇跡は瞬く間にインディオたちの間に広まり、避難していた者たちがチャン・サンタ・クルスに集まってきた。半島東南部に確立されたこの聖地は、メキシコ連邦政府からもユカタン州政府からも独立した自由で主権のある領域へ変貌した。ラディーノ軍とインディオ軍は境界線上で激しく衝突したが、勝敗はつかなかった。

インディオ軍はメリダを目指すことはなく、一方州政府軍も殲滅戦をしかけることはなかった。インディオたちは従来どおり畑を耕す傍ら、戦闘に参加し、十字架を守った。ベリーズのイギリス人から買い取る武器弾薬の代金は、高価なマホガニー材、赤色染料の原料となる蘇芳、労働力供出で賄った。白人たちは恒常的なゲリラ戦の前に、サトウキビ栽培の維持が困難になったが、それに代わる農作物としてヘネケン栽培に重点を置くようになった。国際市場でヘネケン価格が上昇したからである。ヘネケン荘園では白人側に味

方したインディオも反乱軍から逃亡してきたインディオもペオンとして働いた。反乱軍が支配する地域を除きユカタン半島の大半はインディオを安価な労働力とするヘネケン荘園制が確立された。それは擬似奴隷制であった。メリダは繁栄し、密林のクルソブ（語る十字架の信徒）たちは栄養不足と病で死んでいった。一方には閉鎖的共有地社会、もう一方には外部に開放された近代的社会が並存し、およそ半世紀、この状態が続いた。しかし 1893 年、メキシコがイギリス領ベリーズを承認したために、イギリスはマヤ族への武器供与を停止した。1899 年、ポルフィリオ・ディアスの命を受けたイグナシオ・ブラボ將軍は海軍と共同戦略で反乱軍の鎮圧に向かった。海軍はバカルルを南から攻撃し、ブラボは北からチャン・サンタ・クルスに攻め込む作戦であった。4 大隊は砲撃で敵陣を崩した。バカルルは 1901 年 3 月に、チャン・サンタ・クルスは同年 5 月に陥落した。11 月、ディアスはキンタナロー地区の創設を議会に提案した。この決定によってユカタン州は 3 分の 1 の領域を失うことになったが、13 の有力な特権階級は新しく制定された州を分割して、支配する特典を得た。²⁰

結 び

3 世紀に及ぶ不遇・不満に満ちた先住民の反乱は不可避であった。社会的経済的不正義が引き金となり、それが積年の復讐心によって増幅され、盲目的破壊と殲滅につながった。マヤ族には反乱する十分な動機があったが、カスタ戦争はユカタン全土を荒廃させ、住民を苦しめ、20 万人以上の死者を出した。砂糖とヘネケンの荘園は破壊され、萌芽的産業は崩壊し、ユカタンの経済的発展は遅滞した。マヤ族同士間の不信感も募り、ラディーノとインディオ間の怨念は深まった。二つの

民族の生き方はまったく異なるものであった。マヤ先住民族の生活の場は村落共同体である。個人は共同体の一部であり、共同体全員の善のために畑を耕し、家屋を作り、ときには侵入者と闘った。一方、ラディーノたちはヨーロッパ的資本主義の信奉者であり、利益を追求する個人主義者たちであった。土地は効率的生産を約束する資産であり、かつ投機の対象であった。そこではインディオは廉価な労働力でしかなかった。二つの非対称的世界が並存することは不可能であった。神聖な土地を強奪し、そこに住むインディオを奴隷化しようとしたとき、祖先伝来の土地を守ろうとした者たちの反撃は、篡奪者の予想をはるかに超える激しいものだった。

ユカタン半島のマヤ族が反乱を起こした同時期に、全国各地でも相次いで農民運動が炸裂した。しかし、両者の性格はかなり異なっていた。まず、マヤの反乱はエスニック的同一性において際立っていた。1847 年、マヤの不満が爆発してから、1901 年に連邦政府が鎮圧するまで反乱軍はマヤ先住民族のエスニック集団によって構成されていた。このような性格から、その運動はユカタン半島を越え、他の地域に拡大することはなかった。反乱の指導者もマヤの首長か下層メスティーソであった。一方、西部のナヤリ州で武装蜂起し農民を率いたマヌエル・ロサダはメスティーソのカウディージョであり、チャルコの農民反乱の指導者フリオ・ロペスは急進的社會主義者であった。そしてゲレロ・モレロス・プエブラで農民を動員したフアン・アルバレスは軍人であり大統領職まで務めた政治家である。反乱を率いたリーダーの属性もユカタンと他地域では同一ではなかったのである。

また、他地域の農民が奪われた土地の奪還と圧制の糾弾を掲げて立ち上がったのに対

し、マヤは伝統的共有地の回復と並び、教会秘蹟費用の撤廃と人頭税の廃止を要求した。共有地を守ろうとして立ち上がったのは、民族のアイデンティティを守るための行動だった。周知のように土地というものは、農民に穀物をもたらし、棲家を与え、また共同体の祭祀の場を提供した。マヤ先住民が目指した

ものは、植民地時代のラディーノの影響を受けているとはいえ、白人たちが侵略する以前に彼らが享受していた伝統的共同体社会の復活である。それはエスニック性が濃密に反映されたマヤの自律的共同体であった。

(やまさき・しんじ 早稲田大学政治経済学術院 教授)

1 Sierra O'Reilly, pp.140-141

2 本稿では、「ラディーノ」という語彙を、非マヤである支配者・搾取者である白人やメスティーソを指す言葉として使用する。

3 山崎, p.199

4 Florescano, p.299

5 Ibid., pp.300-301 イマンは先住民たちの関心を引き付けるために、彼らに課された宗教的義務の廃止、税の軽減、武器の貸与を盛り込んだ法令を發布した。

6 Reed, pp.37-38

7 Berzunza, p.265

8 Góngora, p.199 1843 年 12 月 14 日、ユカタン共和国はメキシコ共和国との条約を締結しメキシコ共和国に復帰した。後者が軍事司令官と知事の前者による任命権、荘園の再建、税の優遇、メキシコ側の港との自由貿易、共和国議会の国会議員の任命権、過去の清算という条件を受け入れたからである。そして 1844 年 1 月 11 日、ユカタン知事、サンティアゴ・メンデスが政令を公布したことによって、ユカタンはメキシコ共和国へ正式に復帰した。

9 Reed, p. 42

10 Reifler Bricker, p.191 ボニファシオ・ノベロとフロレンティノ・チャンは、ラディーノからその野蛮性を非難され、次のように反駁している。「いま、われわれがあなた方を殺しているが、その手段を最初に教えてくれたのは、あなた方だった」

11 Góngora, pp.201-203

12 Reed, pp.63-66 ベタンクールは「チを逮捕にきた州兵がチの農場を略奪・放火し、先住民の少女を暴行したうえに、捕らえた先住民たちを銃殺したことがチの怒りを誘発し、報復につながった」とテピチの虐殺の背景を語っている。Betancourt, pp.116-117

13 Reifler Bricker, p.185 1847 年 12 月、武装闘争を開始したボニファシオ・ノベロとフロレンティノ・チャンは以下の表明を行った。

「皆様にわれわれがどのような条件を求めて戦っているかを申し上げることは適切と思われます。インディオ同様、白人に対しても税を撤廃すること、またインディオが、白人と同額の謝礼で結婚できるように結婚の謝礼を廃止することです。」

14 Dumond, pp.179-180 ツカカブ協定の文言作成はバルバチャノの代理人カスト・ベラ神父とパットの間で行われた。

15 Lapointe, p.71

16 Betancourt, pp.142-143

17 Reed, p.116 ジョセフ・オワイトに率いられた 938 名のアメリカ兵はニューオーリンズで乗船後、半島北部のシサル港に上陸し、その後メリダ南方のテカシュに派遣された。

18 Ibid., pp.114-115, pp.125-127

19 Rodríguez Peña pp.72-73 共和国大統領となったベニト・フアレスはこの唾棄すべき交易に反対し、1861 年に廃止した。

20 Betancour, pp.148-149

参考文献

Berzunza Pinto, Ramón, Desde el fondo de los siglos, exégesis histórica de la Guerra de Castas, Editorial Cultura, México, 1949

Betancourt Pérez, Antonio, Sierra Villareal, José Luis, Yucatán una historia compartida, SEP, México, 1984

Dumond, Don E. El machete y la cruz, la salvación de campesinos en Yucatán, UNAM, México, 2005

Florescano, Enrique, Etnia, Estado y Nación, taurus, México, 2001

Góngora Biachi, Renan A., Ramírez Carrillo, Luis A., Valladolid: una ciudad, una región y una historia, Universidad Autónoma de Yucatán, Mérida, 2000

Lapointe, Marie, Los mayas rebeldes de Yucatán, Secretaría de Educación de Gobierno del Estado, Mérida, 1997

Reed, Nelson, La Guerra de Castas de Yucatán, Biblioteca Era, México, 1976

Reifler Bricker, Victoria, El cristo indígena, el rey nativo, México, FCE, 1989

Rodríguez Peña, Javier, Guerra de Castas. La Venta de indios mayas a Cuba, 1848-1861, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, 1992

Sierra O'Reilly, Justo, La Guerra de Castas, Testimonios de Justo Sierra O'Reilly y Juan Suárez y Navarro, CONACULTA, México, 2002

山崎真次, メキシコ、民族の誇りと闘い、新評論、2004

「本稿は、財団法人櫻田会の政治研究助成（2009 年度）による成果の一部である」

〔ラテンアメリカ参考図書案内〕

『ラテンアメリカにおける日本企業の経営』

山崎 克雄、銭 祐錫、安保 哲夫編著 中央経済社
2009 年 3 月 269 頁 3,200 円＋税

1980 年代半ばから 2006 年に至る間に日本企業の経営・生産システムの国際移動の研究と現地調査を重ねてきた研究グループが「適用・適応のハイブリッド」モデルによる、2000～06 年の間に行ったメキシコ、ブラジル、アルゼンチンでの製造業工場とベネズエラでの帝国石油の石油開発事業の現地調査結果から、日本式経営がどのように導入されているか？ アジア等他地域での日本企業経営と何が異なるか？などを、14 人の経営・企業等研究者が分析している。

日本型生産システムの適用度を、作業組織とその管理運営、生産管理、部品調達、参画意識、労使関係、親－子会社関係の 6 項 23 の視点から評点を出し、これまで調査してきた世界での平均、アジアや欧米での数値とラテンアメリカの平均を比較し、各論としてメキシコ、ブラジル、アルゼンチンの国別日系工場の特徴を挙げ、自動車産業についてはトヨタ（ブラジル、アルゼンチン、メキシコ）、日産（メキシコ）、ホンダ（ブラジルの二輪・四輪、メキシコ）、デンソーを、電機では東芝（ブラジル）と三洋電機（アルゼンチン）のケース分析を行っており、ブラジル等では欧米企業の新しい生産戦略も紹介している。

〔桜井 敏浩〕